

張愛玲の自伝的小説『小団円』について
——米国人の夫汝狄とそのモデル、ライアーの比較を中心に——

鈴木基子*

Eileen Chang's Autobiographical Novel *Little Reunions*:
Comparing the Characters of Rudy and Ferdinand Reyher

SUZUKI Motoko

Abstract

This paper focuses on the characters of Julie and Rudy in *Little Reunions*. By comparing biographies with the novel, I discuss the writing of *Little Reunions* and its background in terms of Eileen Chang's psychological state.

Despite their contrasting personalities and 29-year age difference, Reyher and Chang formed a writing crew. Reyher struggled with illness and poverty, and Chang suffered from anxiety resulting from her life in a foreign country, yet the two were close partners and lived as a married couple for 11 years.

Four pages into the autobiographical novel, there is a description of Rudy emphasizing his negative aspects, and there is also a mention of Julie's abortion. The abortion scene is fantastical, confused, and unrealistic.

After reading the novel, readers may assume that Eileen Chang's actual life in America was also terrible. However, Chang and Reyher appear to have had a happy marriage, despite some ups and downs. Chang never had children, which may have been due to the mental and physical hurt that she experienced as a woman. Her pride and discontentedness or shame in being born into a famous family developed into a loathing for her descendants, who would inherit the family wealth.

Keywords : modern Chinese literature, reality and fiction, Eileen Chang, Ferdinand Reyher, Little Reunions

1. はじめに

『小団円』（皇冠文化出版有限公司）は1976年の執筆直後には出版が許されず、長年埋もれていた。発掘され2009年に発売されると、中華圏でベストセラーになった。日本ではほとんど論じられていないが、張愛玲の人生と文学を考える上で極めて重要な作品である。

『小団円』は張愛玲の自伝的小説と言われ、ヒロイン盛九莉の成長と恋愛遍歴の物語である。九莉の学校と大家族のエピソードとともに同性愛、婚前交渉、初恋、結婚、離婚、妊娠、中絶、再婚などが、女性心理を中心に描かれる。登場人物が百名以上にのぼり、一大家族史とも読める。内容構成に問題があると宋淇に指摘され、張愛玲は亡くなる時まで修正に努めていた。本稿では原本を対象とする。¹⁾

筆者は『小団円』の主要な3名の女性人物（本人九莉・おば楚娣・母蕊秋）について、モデルとなった女性の実像と作中人物の比較を行ったことがある。²⁾ 女性の生き方の点では大きな違いを見せながらも、恋愛においては共通するところが多かった。それに対し、張愛玲の2番目の夫となった米国人ライアーと、彼をモデルとした

キーワード：中国近代文学、現実と虚構、張愛玲、ファーディナンド・ライアー、小団円

*平成25年度生 比較社会文化学専攻

人物、汝狄の間には大きなギャップがある。最初の夫、胡蘭成については先行研究でも多く論じられているが、ライアーについては司馬新の書籍を除いてあまり論じられていない。他人の眼に映った張愛玲と、張愛玲の自覚の間には乖離が存在する。その乖離が自伝的小説に書きこまれていると考える。

本稿では、九莉と汝狄に焦点を当て、伝記と小説との比較を通じて、そのような小説を書いた心境を、『小団円』の登場人物と張愛玲の家族の背景と合わせて考える。

2. ライアーと張愛玲の結婚生活（1956年8月から1967年10月まで）

ふたりが知り合い、妊娠から結婚に至る経緯やその間の心情について、本人たちによる記述は見つかっておらず、先行研究によってまとめておく。

2. 1 ライアーの経歴

ライアー（Ferdinand Reyher）は1891年7月26日に米国はフィラデルフィアのドイツ移民の両親のもとに生まれた。1908年にペンシルバニア大学で文学を学び、³⁾ 1912年にハーバード大学で修士の学位を得た。1913年からマサチューセッツ工科大学で教職に就いたが、わずか1年で辞めてしまった。生まれつき自由でロマンチックな性格であり、拘束されず世界各地を周遊するのが好きであった。その後、ボストンポスト（The Boston Post）の新聞記者となり、第一次世界大戦のヨーロッパに行き、記事を書いた。⁴⁾ 1917年にフェミニストのRebecca Hourwichと結婚し、一女フェイス（Faith）に恵まれたが、9年後の1926年に離婚する。ライアーはヨーロッパと米国を何度も往復し、世界各地に文学愛好の友人を作り、米国の雑誌に投稿していた。⁵⁾

1931年8月から1942年までの12年間、ハリウッドで映画の脚本作成に従事し、多くの記事と作品を書く。⁶⁾ ベルリンでは、劇作家のベルトルト・ブレヒトとも親交を持った。⁷⁾ 華やかなハリウッドの世界で大金を稼ぎながらも、贅沢を好み散財する生活を送った。1930年代中期にはマルクス主義に傾倒したが、共産党には加入しなかった。⁸⁾ 根っからの自由人で、世界中を渡り歩き、多くの友と交際し、著述を行い、浪費しながら人生を謳歌するロマンチックな文人であった。

1943年ライアーは転んで足の骨を折り、さらに軽度の中風（脳卒中）を患った。1954年には入院生活を送り治療にあたった。⁹⁾ 彼は1955年から、マクドウエル・コロニーに入居した。それは、1907年に資産家のマクドウエル夫妻が、世界の芸術家の交流の場としてニューハンプシャーに作った芸術村のことである。食事が提供され、住居と仕事小屋があてがわれ、多くの芸術家と自由に交流することができた。ここで1956年にライアーは張愛玲と出会い結婚する。

2. 2 ライアーと張愛玲の結婚時の背景について

張愛玲は1955年秋に香港から、米国難民法によって渡米した。いわゆる亡命作家である。1953年の難民法は、主として共産圏からの難民を受け入れた。¹⁰⁾ 司馬新によると、3年間で専門的な学識を身に付けている極東出身の5000名に米国永住権をもたせることを目標とした。張愛玲はその内の「外地人」2000名の枠で申請した。¹¹⁾ 張愛玲はニューヨークで、旧友の炎櫻（小説では比比）と母の友人胡適に再会した。翌年1956年3月から6月までマクドウエル・コロニーで生活することになった。3月13日に張愛玲はライアーに出会い、お互い意気投合した。5月12日のライアーの日記によると同衾するようになった。¹²⁾

ライアーは1956年5月14日に居住期限が来たため、ニューヨーク北部ヤドの文芸キャンプへ移って行った。¹³⁾ その頃、張愛玲はライアーとの子を妊娠していたかもしれず、まだライアーがそのことを知らず、彼が主体的に結婚の意思表示をしない以上、彼女は結婚を言い出せなかった。

劉瑛は「張愛玲とライアーの出会いが同棲に進展する異常さから判断すると、張愛玲はライアーと結ばれることを切望しており、それにより知らない環境で一種の安心感が得たかったのであろうことは明らかである」¹⁴⁾ と述べる。蕭雅文は「張愛玲は思いがけず、ライアーとの生活に入り、ライアーは自分より30歳年下の女性に深く惹きつけられた。…（略）…ライアーというこの情熱的な米国男性は思いやりと理解で、黙々と優しい心で彼女を動かした」¹⁵⁾ と述べる。劉は張が積極的であり、蕭はライアーが積極的だったとし、両者がふたりの恋愛に対

する男女の態度の見方は対照的である。どちらが真相に近いかは不明だが、ともかくふたりは急接近し、関係が急進展した。張愛玲は異国の不安と孤独の中で、出会いに感謝し、相手の積極さを受け入れたのであろう。7月5日、張愛玲は手紙でライアーに、妊娠を告げた。ライアーは手紙を受け取るとすぐに求婚の手紙を書いた。7月6日、張愛玲がまだライアーの返信を受け取らない時に彼に電話をかけ、会いに行った。ライアーはレストランに彼女を案内し、求婚した。¹⁶⁾ 張愛玲はライアーの求婚をすぐに受け入れた。彼は子どもを望まなかったため、ニューヨークに行き、シナイ病院で妊娠の確認をしたうえで、4か月の胎児を中絶した。¹⁷⁾ その間、張愛玲は中絶の後遺症によるものか、病が重く体調不良に苦しめられた。¹⁸⁾

8月14日に、親友炎櫻と出版エージェントのマリー・ローデルの立会いのもと、ふたりは結婚した。出会いから結婚までわずか5か月のスピード婚であった。司馬新は「愛情の面で、張愛玲自身はこれまで主体的（自発的）に行動してきたわけではない。相手が交際を求めてきて、彼女は感動したのである。彼女は旧式な中国女性であり、ひとりの男性に決めたら、考えを変えようとしなかった」¹⁹⁾ と書くが、張愛玲は中国で胡蘭成と結婚する時も米国でライアーと結婚する時も、相手の強い求めによってはじめて動く、受け身の対応であった。

ライアーは65歳のドイツ系米国人、張愛玲は36歳の中国系移民、性格はライアーが明朗で快活な自由人、外向的、ロマンチック、楽観的であったのに対し、張愛玲はもの静かで、内向的で人と交際せず、現実的、悲観的であった。ライアーは早寝早起きをし、家事料理ができたが、愛玲は夜型人間であった。²⁰⁾ ふたりは様々な点で対照であったが、小説と映画のシナリオを書くことが共通していた。29歳の年の差があったが、共通の話題の会話ができる夫婦であった。病気と経済苦を抱えたライアーと、異国で生活不安がある張愛玲とは、お互いの欠点を補って寄り添い合えるパートナーであった。

このように張愛玲は亡命移民した米国社会での孤独と不安の中でライアーと出会い結婚した。

2. 3 ふたりの11年の米国生活

ふたりが11年の結婚生活を送った時期の米国を見てみよう。1950年代の米国はマッカーシズムの旋風が吹き荒れていた。共産主義者のライアーが、赤狩りの中で苦しい立場に置かれたことは想像に難しくない。

ふたりは米国内を転々とした。²¹⁾ 理由は、主に経済苦であった。固定的な収入はライアーが受け取る社会福祉金、月に50ドル程度だけで、ふたりの印税や原稿料を加えても生活は苦しかった。「1956年から1967年までの10年あまり、張愛玲はずっとライアーのそばにつき添い、彼女はほとんど全部の家庭の支出と、医療費を負担していた」²²⁾ というように、夫ライアーに経済力がないため、妻の張愛玲が生活を全面的に支えていた。サンフランシスコで、ライアーは3000ドルをシナリオ代として会社から前借したが、踏み倒すことになった。満足のいくものが書けなかったからだという。²³⁾ そのうえ、中風を患い、何度も入退院を繰り返し、ヘルニアの手術を受けるなど、ライアーには健康上の問題もあった。²⁴⁾

そんな状況であったが、ふたりは街を散策したり、映画を見たり、買い物を楽しんでいた。相思相愛の静かで平凡な幸福があった。結婚生活は経済だけで成り立つものではない。ライアーは半身不随になっても頭はしっかりしていた。彼は小話やハリウッドの笑い話を愛玲に聞かせた。于青は「彼は実生活で彼女を助けることができないが、精神的に安らぎを与えなければならないとわかっていた」²⁵⁾ と述べる。愛玲にとってライアーの存在は心の支えであり、不安な米国生活のオアシスでもあった。

1963年からライアーはほとんど寝たきり状態になり、大小便を失禁するようになった。²⁶⁾ 愛玲は数年間看病と身の回りの世話をし、1967年10月8日にライアーを看取った。ライアー76歳、愛玲47歳であった。彼らの人生を、蕭雅文は「彼らの婚姻は11年にわたり、ずっと穏やかな友人同士のような夫婦の情を持ち続けていた。苦境でお互い力を持って助け合い、知恵を出し合って生きてきた」²⁷⁾ と述べる。司馬新は「ライアーの逝去は張愛玲にとって救済であり、また喪失であった。救済というのは、彼女自身は強い女性ではないので、数年来、彼の世話をし、疲労困憊したから。喪失というのは、ライアーは彼女の生涯で唯一彼女のことを愛し、関心を持ってくれた人であったから。ライアーが逝去した1967年に、彼女はこのような愛は、人生でもう2度と見つけることができないうと、思っていた。しかし、ライアーに対する愛のために張愛玲は大きな代価も払った。それからもう、彼女は愛を求めることを止めたのだ」²⁸⁾ と述べる。張愛玲とライアーの愛の絆は固く、ライアー亡き後、彼女はこの愛を貫き通した。このように11年間の結婚生活は、他者からみると、紆余曲折があり、きれいごとでは行かず、平

坦ではなかったが、婚姻が破綻することなく、最後まで連れ添った。精神的にも経済的にも職業的にも、お互いが強い絆で結ばれて支え合っていた。他人の眼を通した伝記からはそのように判断することができよう。

ライアーの死に際して、張愛玲が書いたメモが残されている。中英混合の原文から、動転した心理が伺える。

「2週間後ファードが死んだ。最期の日の状況を思い出すのが耐えられない。生命の究極のレッスン (ultimate lesson) が実に耐えがたいものであることを知った。ようこそ (welcome)、空の飛行機よ、運命の轍 (track of fate之grind on) のように私をひき殺せ。『さあ、時と運命よ、わたしの上を転がれ、私をおしつぶせ、私を壊し、私を忘れろ (Come, time & fate, roll over me, flatten me, destroy me, forget me)』喜んで消されよう、それとともに消されるものすべてと (wiped out, ∴ all that is wiped out with it)』²⁹⁾

張愛玲がライアーの死に対して強い大きなショックを受け、抛り所をなくし、支離滅裂で混乱した様子が伺える。殴り書きのようなメモから、精神的支柱を失い、喪失感が強かったことがわかる。

3. 伝記と小説の描写の比較

小説の『小団円』では、米国における汝狄と九莉の生活が描写されるのは、4頁分に過ぎず、ほとんどが汝狄の性格と九莉の凄惨な中絶描写である。³⁰⁾

3. 1 伝記に見る張愛玲の中絶について

前述の通り、ライアーは子どもを望まなかったので、ニューヨークに行き、シナイ病院で妊娠の確認をしたうえで、4か月の胎児を知人のアパートで中絶した。そして、1956年8月14日にふたりは結婚した。出会いから結婚までわずか5か月のスピード婚だった。

司馬新によると、ライアーは子どものことを「The thing (もの)」³¹⁾といい、愛玲に中絶を勧めた上で、求婚をした。すでに高齢で婚歴があり、先妻との間に一女がいて、散財もし、もはや子どもを育てる力なかったからであろうか。張愛玲が実際に子どもを産みたかったのかどうかは定かでないが、すぐライアーの意見を受け入れた。³²⁾

張愛玲が本当に妊娠、中絶したかどうかについて考えてみる。暁松は、年齢が高齢で出産リスクがあること、これまで子どもを産むことを考えてこなかったこと、「もし、もし子ども（気がかりなもの）がいれば、文学創作で道を切り開こうとしている心を取り戻すことができなくなる」と、彼女が子どもを産むことを考えなかったと書く。³³⁾そして「すでに4か月になり、お腹が目立ってきた。仕方なく《非合法》の男性医師を探した。双方の斡旋のもと、男性医師は1,400ドル払うこと、2.ライアーは現場にはいけない、とふたつの条件を提示した。当時、彼女は40歳近く、とても苦しみに耐えられず、もともと手術のリスクを心配していたが、男性医師は、少しもためらわずに実行した」³⁴⁾としている。

司馬新は論理的可能性として、1.妊娠の物語をねつ造した、2.不幸に流産した、3.ニューヨークで中絶を受けた、とそれぞれの可能性に言及し、2か3の解釈が支持できる証拠があると述べる。1954年に張愛玲が香港で執筆した『赤地之恋』を1956から59年に米国ピーターボロで英訳した時に、詳細な中絶の場면을追加して入れたから、とも書く。³⁵⁾ライアーには日記をつける習慣があり、この時期の日記を見れば、事実を確認できそうだが、7月中旬から10月中旬の部分は行方不明だとのことである。³⁶⁾ 鄺文美が1976年3月25日に張愛玲に宛てた書簡に「Stephen (=宗淇) はあなたがニューヨークで中絶をしたことを聞いたことはありません。あの時あなたが私には教えてくれました。すべてははっきり覚えております」と書く。³⁷⁾ 鄺文美は宗淇の妻で、張愛玲と香港アメリカ新聞処 (U.S.I.A) で知り合い、非常に気が合い、長年家族ぐるみの交際を続けてきた。以上を考慮して、筆者は張愛玲が実際に中絶した可能性が高いと考える。

3. 2 『小団円』の描写

米国における描写は、わずか4頁に過ぎず、ほとんどが汝狄の性格と九莉の中絶描写である。ふたりの出会い

や恋愛と結婚生活はほとんど描かれていない。書かれるのは、「彼女も会うのが遅すぎたとは思わなかった。彼は年を取っていたが、数年早く知り合っていたとしても、彼が彼女のことを好きになったとは限らない、ましてや長く続くはずもなかったからだ」³⁸⁾のように、ひどく冷めて愛情と熱意に欠ける老人と熟年女性の恋愛である。九莉は出会うのが遅かったことを恨みはしなかったし、汝狄がもっと早い時期に(彼女と)出会っていたとしても、彼女をずっと愛し続けることはなかったであろう、という意味である。

汝狄の性格に関する描写は「僕はいい加減に過ごしてきた」「汝狄はお金では気前が良い」「僕は臆病な人間です。」「貯金していない。ポーカーをやって談笑している間に家を買って、また知らないうちに売った」「僕はもともと根っからのひき逃げ(hit and run)」とマイナスに取られるものが多い。

『小団円』では米国描写が唐突に現れる。「10数年後彼女はニューヨークにいた。その日いつもと違って午後に入浴した」の出だしから始まる。中絶処置をしてくれる人を待ちながら、九莉はアパートで入浴していた。すでに妊娠4か月になり、体が豊満になっていた。

九莉は、3か月以降はリスクが伴うことを小説で読んで承知していた。30歳そこそこの保険のブローカーのような外見の男性が非合法に中国式「薬線」を用いて処置した。病院ではなくニューヨークのアパートの一室であった。汝狄は立ち合いを許されなかったが外出せず、処置をする男性が部屋に入るのを、手に斧を持って見ていて「もし君(盛九莉)に何かあれば、僕はやつを殺してやる」と言った。汝狄は感情を露わにするが、中絶を阻止する態度はとっていない。

衝撃的なのは九莉が中絶処置直後の描写である。汝狄がフライドチキン店に行って夕食に1羽買って来る。九莉が激痛でたうち回っているのにかまわず、彼は九莉にそれを食べるように勧め、自ら美味しそうに食べる。優しいけれども無神経な夫の態度に反発を感じながら、九莉は米国生活の痛手をひとりで引き受ける。

九莉の中絶がはたして事実であったか否かは明確には書かれていない。幻想的とも言える誇張表現が多いうえに、九莉の親友比比は、九莉の妊娠を告げられても「(妊娠が)外見上わからない」と言い、中絶を九莉の想像に過ぎないと断ずる。汝狄は「小さな盛(九莉の子)を産んでもいい」と言いながら、少しためらう。³⁹⁾中絶を主張せず、逆に産む可能性も示唆している。それに対して、九莉は「要らないわ。一番良い状況であっても子どもは要らないわ。——お金があっても、頼れる世話をする人がいたとしても」⁴⁰⁾と笑って断言する。中絶に積極的であったのは、汝狄ではなく九莉に見える。九莉は汝狄ほど躊躇わずに、体に宿った命を断とうとしている。

小説の最後の部分に、「彼女(九莉)はこれまで子どもを望んでいなかった。もしかしたら、一部分の原因は、彼女にも子どもがいたら、(その子どもが)きっと彼女に辛く当たるはずで、彼女の母(蕊秋)に代わってその子どもが彼女に復讐すると思うから」⁴¹⁾と書かれる。母娘関係の失敗から、九莉は子どもが欲しくなかった、という記述である。このように小説では子どもを持つことを否定する九莉の姿が示されている。

夜、九莉は浴室の明かりの下で、水洗便器の中に10インチ(25.4センチ)の男児を見た。彼女は恐怖を感じた瞬間に、水洗のレバーを引いて流してしまう。比比は、中絶したことをまるで信じようとせず、盛九莉の想像に過ぎず、400ドルを無駄に使ったと思っている。⁴²⁾このように誇張表現が多く、妄想的な描写である。なぜ妊娠4か月まで気が付かなかったのか。なぜ闇で処置した理由を書かないのか。ニューヨークで入院しないで、中国の「薬線」を使用し、4か月の胎児が中絶できるものなのかどうか。そもそも4か月で10インチは大きすぎるし、水洗トイレで流れるのも不思議である。なぜ、胎児が男児であったのか。また、なぜ処置後の連絡員が、マーシャという百貨店勤務のユダヤ人なのか。なぜ香港で医学を学んだ炎櫻のモデルの比比が、中絶を否定しているのか。⁴³⁾等々九莉の妊娠と中絶を巡る描写には多くの疑問が残るが、小説の真相は闇の中である。

3. 3 伝記と小説の共通点と相違点

ふたりの生活について、伝記と小説の共通点と相違点を整理してみる。共通点は、女性が非合法な手段を用いてニューヨークで中絶した可能性が高く、中絶は4か月で処置に苦しんだこと、男性が壮年期に経済管理能力がなく、晩年にまともに生活する経済力がなかったことである。

相違点は、伝記では詳細に書かれていた出会いと恋愛経過・結婚生活が、小説ではほとんど書かれていないこと。特に、伝記的記述によれば、ふたりは短期間で恋愛関係になって結婚したのだが、小説では、九莉は冷めた眼差しで汝狄を見つめていて、愛情関係が希薄である印象を与えている。妊娠した子どもの出産について、伝記

ではライアーが出産を望まず、愛玲は不明であるか、『小団円』をもとにして産みたくなかったと書かれ、小説では男性は産んでも良いと思ったが、女性は産みたくないという意志であったこと。胎児の性別について、伝記では未記載か、『小団円』を根拠にした男児であるが、小説では男児であること。男性の性格について、伝記では、ライアーの長所も短所も比較的客観的に書かれているが、小説では汝狄の短所が多く書かれ過ぎて、汝狄にマイナスの印象が与えられること。伝記では、ふたりは短期間に熱愛して結婚したが、小説では、結婚・経済苦、生活保護の具体的記載がなく、伴侶であったことが推察されること。病気の世話について、伝記では具体的に記載があるが、小説では全くないこと。妊娠と中絶について、鄺文美の書簡が示すように実際に張愛玲が中絶を経験した可能性が高いが、小説では非現実的に書かれている。

以上見てきたように現実と小説には大きな乖離がある。現実には恋をして、苦労はあっても破綻せず、それなりに平和な結婚生活を送ったことが推測されるのに対し、小説では、エキセントリックな内容が延々と描かれている。

4. 小説『小団円』の女性たちと家族背景

ライアーと汝狄を通して、伝記と自伝的小説『小団円』の比較を行ったが、他者の眼に映るのが（伝記）であり、作家の自分語り（自伝）は自画像の演出であり、どちらが正しいとかは言えるものではない。小説はあくまで虚構であるが、自己認識（自伝）と他者認識（伝記）の乖離の背景と原因を探ることは、作家と小説への深い理解の一助になるものであろう。

4. 1 女性の心と体の傷

張愛玲は、なぜ小説『小団円』で、そのようにエキセントリックな汝狄との生活を描いたのであろうか。小説の3名の女性たち（九莉・おば楚娣・母蕊秋）は、すべて恋愛と結婚が破局を迎える。3名とも、恋愛しても結婚しても、女性が性的に傷つけられ侮辱される体験を持つ。九莉の初婚相手の邵之雍（胡蘭成がモデル）とは、結婚後も止まぬ彼の派手な異性関係によって破局する。燕山とは、邵之雍が原因でできた身体の傷（子宮頸部裂傷）が契機となり失恋する。おば楚娣は、いとこの息子（表大爺の息子）であった緒哥哥の優柔不断な性格に翻弄されたあげくに失恋する。楚娣はドイツ人と不倫を経験し、同僚には強姦される。母蕊秋は、妾がいた夫乃徳との性格と生活態度の不一致が原因で離婚する。蕊秋は多くの親戚や外国人と派手に交際する女性で、離婚後外国に出て暮らした。

小説の背景には、一夫多妻制で、しかも、いとこ間や異世代間（輩分が異なる）の結婚を許さぬ宗族法の掟が通用する儒教文化に支えられた中国社会があった。婚前交渉や不倫が白眼視される伝統文化の中で、五四運動の影響を受け、彼女たちは体を張って愛を求めて生きようとしたが、男性たちに裏切られ続けた。「女はいつも命がけよ」⁴⁴⁾の言葉には、生命のリスクを感じながら、命がけで生きて行かねばならなかった女性の思いが凝縮されている。九莉は米国人汝狄との子どもも産まなかった。女性たちは中国でも米国でも、心身に表に見えない傷を背負って命がけで生きている。

4. 2 子孫継承の否定と現実の家族

小説中で、中絶した胎児が男児であったことは、大きな意味を持つと思われる。結婚しても息子ができなければ妻が離縁される時代であった。儒教で支えられている中国社会は男性中心主義でもあった。小説の他の男性の生き方を振り返ってみよう。例えば、父乃徳は名家を没落させたふがない人物で、再婚相手の翠華との間に、望んだ子どもを持たせられていない。弟九林は、母蕊秋の不義の子であり影が薄く、結婚できていない。おば楚娣は長年深い交際をする相手がいっても妊娠しなかった。母蕊秋は、親せきや外国人など多くの人と関係を持ち、何度も中絶をしているらしい。このように、小説の主要な登場人物の男女は、子孫の継承をまったくと言っていいほど認められず、否定されている。小説の最後に出現する、九莉と初婚の邵之雍との間の子どものがたくさん出現する場面は、あくまで夢の中の理想であった。このように、女性の心と体の傷を暴露して、男児を抹殺し子孫継承を否定することは、儒教文化を根底から否定し、批判するものであるといえまいか。

張愛玲は散文「造人」の中で「子孫を残すのは危険がある仕事だ」「私たち自身はいずれ死ぬのである。しかし、私たちの種は大地にあまねく播かれる。だが、なんと不幸な種、憎しみの種であろう」⁴⁵⁾と述べている。子孫の継承に、恐怖を感じているようである。張愛玲自身は、祖母が李鴻章の長女の李菊耦で、祖父が大臣張佩綸であり、名門の血筋が流れている。しかし、今の時代でこそ名家であるが、当時は漢奸（売国奴）の家柄として、一族郎党がさげすまれていた。肩身が狭い思いをしていたのである。現実には張愛玲の父張廷衆の家系は、長男張子静が生涯独身であり、父が再婚しても子に恵まれず、途絶えてしまう。

小説に「彼女（九莉）は彼ら（先祖）をいつくしむ。彼らは彼女に干渉せず、彼女の血の中に静かに眠っており、彼女が死ぬときに、もう一度死ぬのだ」⁴⁶⁾とある。日頃、感じていた名門の血筋に対する、わだかまりと誇りの屈折した気持ちを『小団円』に反映させて、血の継承を断絶させることになっているのであろう。中国人相手だけでなく、米国人との間の子どもさえいらないほど、女性の意思は固い。このように中絶した胎児が男児であったことは、一夫多妻制の主人公である男性の性を否定して抹殺したい、子孫継承を恐れる張愛玲の深層心理の表れであろう。

小説『小団円』と現実の張愛玲の家族は、子孫継承の否定の点において、完全に一致している。

4. 3 張愛玲の執筆心境

米国は1865年から1970年まで、すべての州で中絶が非合法だった。⁴⁷⁾たとえ強姦でできた子どもであっても産むのが普通と言われた当時の米国社会である。しかし、闇では行うことができた。もし妊娠していたとすれば、渡米直後で、非合法社会での中絶は大きな恐怖を伴うものであろう。キリスト教による生命尊重の考えが行き渡った米国社会では、中絶は罪であった。張愛玲はその頃病が重く、体調不良に苦しんでいた。だが、彼女は小説に中絶を書いたものの、キリスト教と中絶の関係に『小団円』でまったく言及していない。

『小団円』執筆は、ライアーが亡くなってから8年後の時で、これまでの兼業生活にピリオドを打ち、著述活動のみに専念し始めた時期である。1955年に渡米してから、苦節約20年、再出発の55.6歳の時に、人生を振り返り、思いを吐露したかったのであろう。

張愛玲は母娘関係に失敗し、故意に母黄逸梵を貶めて『小団円』の蕊秋に描写した。⁴⁸⁾ライアーのモデル汝狄は蕊秋ほど貶められていないが、マイナスの部分のみが強調して書かれている。ライアーを心底愛して、情熱的な結婚をし、それなりに仲むつまじく暮らし、生活苦と介護苦にさらされても支え合った11年であった。張愛玲は、これまでも胡蘭成とライアー、他に噂された男性について、まったく書き残していない。手紙が数通残るくらいである。自らのプライバシーを決して明かさぬ毅然とした姿勢と態度を持っていた。彼女にとって、小説を書くことはあくまで虚構であり、私生活とは切り離すべきものであった。自伝的小説に、現実よりも悲惨すぎる内容を書いた心境は、読者を得る為に刺激的な内容で文学効果をねらったのか、不本意な人生に対する心の闇があったからであろう。

5. おわりに

張愛玲は、李鴻章の血を引く名家に生まれ、西洋の教育を受けた、美しく毅然とした聡明な都会女性であった。上海の初期小説では打算的な恋愛を多く描いていた。しかし、現実の彼女の結婚は、まったく打算的でなく、純粹に不器用で、胡蘭成とライアーの2回とも「愛さえあれば」「相互に支え合う人間愛」の結婚をしていた。中国の名家に生まれたが、男性中心主義で儒教思想に覆われた社会で生活してきた張愛玲は、家庭にも結婚相手にも恵まれず、苦労の連続であった。移住先の米国で、親子ほど年が離れたライアーと再婚し、相思相愛で強い絆で支え合っていた。

夫ライアー亡き後に書かれた自伝的小説は、子孫継承の否定を強く感じさせられる登場人物の生き様があり、女性の苦悩と男性の否定が暴露的に描かれていた。『小団円』の九莉は、大家族の中で両親の愛に恵まれず、ドロドロとした人間関係の中で育ち、成人後は男性に翻弄され、凄惨と言ってもよい人生を送っている。

読者はこの小説から、実在の張愛玲の米国生活もそのようなものであったと思ひ込んでしまいがちである。しかし、実際には、いろいろなトラブルを抱えながらも、張愛玲はライアーとそれなりに良好な結婚生活を送った

と思われる。この小説の中で最も衝撃的なエピソードは、九莉の中絶をめぐるものだった。子どもを産まないことについて、小説では、実際よりも女性の主体性を極端に強調していた。妄想的かつ非現実的な中絶手術の描写はその典型である。張愛玲は名家の血にプライドとわだかまり（肩身の狭さ）を感じると同時に、自分の血統が続くことに嫌悪感、恐怖を抱いていたことが察せられる。それがこのような描写に結びついたのでないかと思う。小説と伝記を比較し、現実の家族背景から彼女の心境を考えると、子孫継承の否定意識があったことは断言できよう。

今後、初期作品や上海時代の生活も含めて、張愛玲の人生と文学をトータルに見直す中で考えていきたいと思う。

【註】

- 1) 張愛玲『小團圓』張愛玲典藏8 皇冠文化出版有限公司、2009年3月。1975、6年執筆。以下『小團圓』と記す。
- 2) 鈴木基子「張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚—ヒロイン九莉を中心に—」『研究紀要』第76号、日本大学経済学部、2014年10月。「張愛玲『小團圓』 楚焱の恋愛—モデル張茂淵の伝記との比較を通して—」『研究紀要』第77号、日本大学経済学部、2015年1月。「娘の視点から語る母の物語—『小團圓』と伝記・散文との比較を通して」『人間文化創成科学論叢』第18巻（2015年）、お茶の水女子大学、2016年3月。
- 3) 司馬新『張愛玲與賴雅』大地出版社、1996年6月出版初版2刷、p83。以下、司馬新前掲書と記す。
- 4) 曉松溪月『晚安、張愛玲：張愛玲在美國的日子』中国華僑出版社、2016年5月第1版、p39。以下、曉松溪月前掲書と記す。
- 5) 曉松溪月前掲書、p40。
- 6) 曉松溪月前掲書、pp40-41。司馬新前掲書、pp88-89、p93。
- 7) 曉松溪月前掲書、p41。司馬新前掲書、pp91-92。
- 8) 司馬新前掲書、p89。
- 9) 曉松溪月前掲書、p41。司馬新前掲書、p92。
- 10) 「アメリカ合衆国における第三国定住プログラムによって受け入れられた難民及び庇護申請者等に対する支援状況調査報告」（財）アジア福祉教育財団、難民事業本部、2005年9月、P3、p11。Refugee Relief Act of 1953。
- 11) 司馬新前掲書、pp73-74。Refugee Act。
- 12) 司馬新前掲書、p98。
- 13) 司馬新前掲書、pp99-100。曉松溪月前掲書、p44。
- 14) 劉瑛、昭質「張愛玲與賴雅情感揭秘」『檔案時空』2018年7期、p18。
- 15) 肖雅文「張愛玲的兩次婚姻」『湖南文史』、2002年第4期、p52。
- 16) 司馬新前掲書、pp101-103。曉松溪月前掲書、p49。
- 17) 司馬新前掲書、p103。曉松溪月前掲書、pp50-51。
- 18) 司馬新前掲書、p107。夏志清「序」、p⑭。
- 19) 司馬新前掲書、夏志清「序」、p⑭。
- 20) 于青「張愛玲和她的美國朋友」『書摘』2002年3期、p22。
- 21) 鈴木基子「米國移住初期の張愛玲書簡に関する一考察—1955年から1966年までを中心に—」『研究紀要』第69号、日本大学経済学部、2012年1月、pp3-4、pp6-7。
／鈴木基子「張愛玲書簡に見る米國での生活実態とその人生観—1963年から1995年までを中心に—」『研究紀要』第66号、日本大学経済学部、2011年1月、p65。1956年3月ニューハンプシャーのマクドゥエル・コロニーでの出会いから、夏のニューヨーク、1956年10月から再度マクドゥエル・コロニーへ、そして、1957年4月からニューハンプシャーのピーターボロ、1958年11月から1959年4月の南カリフォルニアのハンチントン、1959年5月サンフランシスコでふたりは居住した。1961年10月張愛玲は台湾と香港にひとりで行き、1962年3月にワシントンに戻る。1966年9月からオハイオ州マイアミ大学、1967年4月からマサチューセッツ州ケンブリッジへ行き住んだ。
- 22) 劉瑛、昭質「張愛玲與賴雅情感揭秘」p19。
- 23) 陳琅語『張愛玲：孤城中的薔薇』天津人民出版社、2017年12月第1版、pp225-226。
- 24) 司馬新前掲書、p109、p164。曉松溪月前掲書、p154。陳琅語前掲書、p226。
- 25) 于青「張愛玲和她的美國朋友」『書摘』2002年3期、p25。
- 26) 司馬新前掲書、p168。
- 27) 肖雅文「張愛玲的兩次婚姻」、p53。
- 28) 司馬新前掲書、p171。

- 29) 馮晞乾「外篇・張愛玲神秘的筆記簿」『在加多利山尋找張愛玲』三聯書店（香港）有限公司、2018年7月香港第一版、p172。
- 30) 『小團圓』、pp177-180。
- 31) 司馬新前掲書、p103。
- 32) 司馬新前掲書、p108。
- 33) 曉松溪月前掲書、p49。
- 34) 曉松溪月前掲書、p50。
- 35) 司馬新前掲書、pp106-108。
- 36) 司馬新前掲書、p106。
- 37) 『小團圓』、pp7-8。
- 38) 『小團圓』、p179。
- 39) 『小團圓』、p177。
- 40) 『小團圓』、p178。
- 41) 『小團圓』、pp324-325。
- 42) 『小團圓』、p180。
- 43) 含瑛『最美張愛玲:我是臨水照花人』中国华侨出版社、2016年8月第1版、p131。
- 44) 『小團圓』、p177。
- 45) 張愛玲「造人」『張愛玲典藏全集 8【散文卷1】1939年-47年作品』皇冠文化出版有限公司、2001年4月、pp159-160。
- 46) 『小團圓』、p122。
- 47) 田島靖則「生命主義とキリスト教—米国の中絶論争に学ぶ」『ルーテル学院研究紀要』、No.40、2006年、p20。/井上紫電「米国最高裁の墮胎自由化判決と憲法修正運動」『アカデミア』第106集、経済経営学編47、1975年6月、p65。「米国では古くから全州が“母体の生命の危機”の場合以外には墮胎を許さない、という厳格法を堅持してきたが……」。
- 48) 鈴木基子「娘の視点から語る母の物語—『小團圓』と伝記・散文との比較を通して」、pp29-38。